
虹を越えて

沖川 英子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹を越えて

【Nコード】

N9277V

【作者名】

沖川 英子

【あらすじ】

彼女は歩いて行く。

逃げるように、追われるように。

ひたすらに、七色のアーチの向こうを目指す。

虹のその先を見ようとした「彼女」の話。

弊ブログ「浮草草子」にて連載していた小説です。

彼女は歩いて行く

彼女は歩いていく。

リュックを肩に食い込ませ俯きながら、陽炎が揺らめく炎天下の道路をひたすらに進んでいく。その足がふと何かに気づいた様に止まる。顔を上げて手でひさしを作り、彼女は目を細める。

ひび割れたアスファルト、錆びの浮いたガードレール、その向こうに広がる鮮やかな真緑の草の海。少し先に浮かぶ島影のような山の上には、純白の入道雲がのっと湧き上がっている。頭上には、目に染みるような深い青。

景色を見やって息を吐くと、右手をすつと頭上に掲げてささやかな日よけを作る。頼りない影であってもほんのわずかな楽になったのか、彼女はすつと目を閉じる。水田を渡る風が短い髪とシャツを揺らし、暑さと日焼けで真っ赤な頬をなでて通り過ぎていく。

しばらくそうして休んだ後、行く先を一度睨みつけ、彼女は再び歩き出す。一定の速さで交互に繰り返される足先を見つめ、ただただ歩く。

右、左、右、左。

そうして、彼女は山の向こうを目指す。まだ見ぬ街を。未だ知らぬ世界を。

虹の向こうを。

不意に風が吹いて、思わず足を止めた。

いつの間にか市街地を抜けていたらしい。考え事をしていて気付かなかったが、歩んできた道の両脇はくすんだ無愛想な家々から青々とした水田に取って代わり、すつと伸びた稲穂が光っている。一帯が夏の激しい陽光を浴びてどことなく白んで見え、その眩しさに涙が出そうになり、右手を掲げてささやかなひさしを作る。

道の向こうにあの山が見える。相変わらず平地に広がる街や田畑をのっそりと見下ろしている、その姿が今はやけに大きく感じられる。ちつぽけで、「丘」と言っても良いくらいで、見る物も何もない、地味な山。それでも今の季節には鮮やかな緑が生い茂り、それなりに夏らしい瑞々しさがある。ここから見えていても、青い草いきれを感じられそうだ。

山の向こうには入道雲が眩しいほどに白く、のっと湧き上がっている。紺碧の空とのコントラストが美しい。日よけ代りに手を頭にやりながら、私は立ち止り、その混じりけのない色彩に見とれる。

入道雲は雨を連れてくる。天が狂ったかのような激しい雨を。それはほんの数十分で終わり、後には雨上がりのうるんだ空気と、夏の光が残される。その芳醇な匂いと景色を思い出しながら、胸には一つの期待が浮かび上がる。

見られるだろうか。

儚く胸が締め付けられる、あの七色のアーチが。

静かに心が躍る。私は再び足を進める。右、左、右、左と一定のリズムで繰り返し繰り返し足を運ぶ。

交互に繰り返されるつま先を見ながら行くうちに、段々と夢の中にいるように体がふわふわしてきた。頭がぼうつとして、自分の体が他人のもののように感じられる。

家を出てから数時間、休むことなく歩き続けている。疲れてきたのかもしれないし、もしかしたら暑さにやられかけているのかもしれない。それでも、出来るだけ足を止めたくなかった。

あの山が私を呼んでいる。

雲は雨を連れてくる

一陣の涼風が田の緑を揺らし雷雲を呼ぶ。その低いうなり声を合図に、大粒の雨がぱたぱたと乾いたアスファルトに黒い染みをつくり始め、あつという間に滝のようになり出す。

彼女はそれを、木のベンチに座って見ている。

バス停の屋根からの雨だれが地面で跳ねて靴を濡らす、それを気に掛けるでもない。心もち首をかしげ、驟雨に煙る風景の向こうにあるものを見透かそうというように、視線は遠くをさまよっている。

雨はバス停の屋根を、板壁を、アスファルトをいよいよ激しく叩く。閃光がどす黒い雲を走り、時折思い出したように空がうなり吠える。呼応するように風がびよ々と鳴り、草木が踊り狂い、雨が舞い、嵐はピークを迎える。

それがしばらく続き、やがて始まりと同じように、唐突に終わる。雷は口をつぐんで遠ざかり、雨風も正気に戻ったかのようにおとなしくなる。薄暗かった風景に陽光が差し、きらきらと夏の輝きを取り戻す。

短い嵐が去る。

雨上がりの空気を胸一杯に吸い込み、彼女はバス停を出る。頭上はかすかに雲がたなびく程度の青空だが、彼女がたどってきた道の上には未だ黒々とした雲の峰が湧き上がっている。嵐の行方を見送ると彼女は先を行こうと振り返る。途端、目を見開き、彼女ははたと息をのむ。

山の上に淡い色が浮かんでいる。

片足を残してほとんどは空の青に同化し消えていたが、それは紛れもなく七色に光っている。彼女はしばしそれを見つめる。瞳はきらきらと黒く輝き、口元が柔らかにほころぶ。

誘われるように、彼女は再び歩き出す。行く手には山が迫ってい

る。

雨上がりの瑞々しく光る水田を横目に歩くうちに虹は消えていた。淡くかすかで、片足しか見えない程度だったから仕方がない。それでも、虹を見たとき胸いっぱいに広がった嬉しさは薄まらず、埋め火のように胸中に留まり、私の足を軽くしていた。

登山道路まであと1kmの案内板が見える。低い山が、今は本当に「山」の威圧感を持って目の前に迫ってくる。私は足を速める。時に水たまりに突っ込み飛沫が服の裾を濡らすが、それすらも心地いい。

歩く、歩く、ひたすら歩く。

追われるように、逃げるように。

「逃げる」という言葉が頭に浮かんだことに少し驚いたが、それも一瞬のことだった。驚きは胸から顔に出るうちに苦みを含んだ可笑しさに変わり、唇には歪んだ笑みが浮かぶ。周りに人がいないのを良い事に、小さな笑い声が漏れる。だが、その低い響きが耳に入った途端、「逃げる」という言葉に酔う自分自身に気付き、すつと気持ちさが静まった。

唇をしっかりと結び、私は軽く顔を上げる。目の前にそびえる山を睨み付ける。

逃避だろうが何だろうが構わない。

今の私に大切なのは、あの山を越えること。その向こうに広がる世界を見ること。
ただそれだけ。

彼女は山に登る

行く手の道が分かれている。右手には今まで歩いてきた道路が大きく曲がりながら続いており、左手には細い道路が山中まで伸びている。彼女は迷わず左を選ぶ。

山にへばりつくように始まった道は、やがて完全に緑に包みこまれる。

道の両側から雑木林が影を投げかける。ぬるく湿った空気が彼女の火照った体を包む。ざくざくとアスファルトを踏みしめる靴元には、先ほどの嵐で折れた小枝や落ちた木の実が散らばる。人も車も滅多に通らぬせいか、一応舗装されてはいるものの、どこか古びた印象がある。

苔むした標識と錆の浮き出たガードレールの脇を通りながら、彼女は時折、ふつふつと湧き出る汗を拭く。

山は意外に騒々しい。

夏の風に揺れる葉ずれのざわめき、名も知らぬ姿も見せぬ鳥の声。降り注ぐ蝉しぐれ。

生き物たちは精いっぱい主張する。自分がここにいるという事を。生きているという事を。

木々は鳴きわめきはしない。しかし、すつくと立つその姿で、旺盛に繁茂するその勢いで、彼らもまた確かに存在しているのだと静かに語る。

声高な、静かな、山全体の主張の中、彼女は足元を見つめながらひたすらに登って行く。はあはあと息は荒く、拭き残した汗が滴り、細い顎を伝って落ちる。

一台の車も通らない。すれ違う者もない。

彼女は独りきり、山に登る。

一体、何がきっかけだったのか、未だによくわからない。こうして、汗を滴らせ息を切らせて山に登る今でも、私を駆り立てたものの正体を掴めずにいる。

例えば失恋したとか、事業に失敗したとか、そういった劇的な出来事があれば分かりやすいのだろう。けれども、これはそういった一言で容易に説明でき誰かの共感を得られるものではない。もっと捉えどころのないモヤモヤとしたものだ。

ふと身を包む空しさ、突然に襲う手放して泣き叫びたくなるような哀しさ、明日を飲み込み心を溶かす不安……と、具体的な言葉を挙げてしまうとそれも違うように思うのだが、とにかくそういった何に依るのかもわからない鬱々とした感情。それらは、きっと誰にでも訪れるもののだろう。普通であれば、こういう理由の無い負の感情は一時心を支配するだけで終わる。後には普段通りの、起伏はありながらも落ち着いた状態に戻る。

けれど、このところの私は違った。不安やいわれなき悲しみや虚無感が絶えず押し寄せ、乱暴に私を掴み、振り回し、翻弄していた。暗いドロドロしたものに捕らわれ、私はどうする事も出来ずにいた。出口のない真つ暗な部屋で、ただ力なく壁にもたれていた。

今は少しだけ分かる。きっと、私はとてつもなく疲れ、倦んでいたのだ。身の回りの様々な出来事や物ごとに。判で押したように続く日々や、狭く重い人間関係や、頭を押さえつける未来に。そして私はそれらから逃れる術を知らなかった。ただその重さに潰されそうになりながら、どこかにあるかもしれない出口を求めて喘いでいたのだ。

あの日。

梅雨の終わりの大雨が降った帰り道。

私はふと空を見上げた。

まだ雨雲が微かに残る不安定な夏の夕空には、強い七色の光が弧を描いて浮かんでいた。

そのあまりの強さに、恐れすら覚える美しさに、背筋が震えた。

夕景にも劣らずにはつきりと己を主張する七色の橋の向こうには、この山があつた。

その途端、私は気が付いたのだ。

自分が生まれてから一度も、山向こうの景色を見たことがない事に。その先に広がる物を何一つ知らない事に。

いや、山向こうだけじゃない、私は何一つ、この街の風景以外の何一つも本当には知らないで、十何年も生きてきてしまったのだ。あまりにも狭い世界で。閉ざされた檻の日々の中で。

強い光の橋を茫然と見つめるうちに、私の胸の中に嵐のように一つの思いが湧きたった。

知りたい。

あの虹の向こうに行きたい。

思いは私の心を捕らえ、焦がし、泣きたくなくなるほどに強く締め付けた。

夕暮れの路上で、私は空を見上げながら立ちつくしていた。

きっと、あの向こうに広がるものを見れば、私は変わる。何かが起こる。そんな予感がした。

そうだ、きつかけは虹だ。あの、はかなく不思議に揺らめく光のいたずらだ。

それが、私を突き動かしているんだ。

あの日も、そして、今も。

頂上から街が見える

何となく明るくなったような気がして、彼女は顔を上げる。見ると、行く手の山道はふつつりと見えなくなり、その代わりに抜けるような青空が広がっている。

登り道が終わるのだ。

彼女ははっと目を見開く。スニーカーの足を速めて、ほとんど小走りに最後の数十メートルを一気に登る。

頂上で、彼女は脇の木に手を付きながら体をかがめ、はあはあと荒い息を整える。

そして、顔を上げる。

夏の陽光にきらめく水田が広がり、合間にはぼつりぼつりと人家が広がる。それが段々と遠くに行くにつれて密集し、やがて灰色にくすんだ街になる。

様々な色の屋根の群れ。ちかりと光るガラス窓。街の中には大きな道路、恐らく国道が通り、様々な車がひっきりなしに行き交う様子が良く見え、それと並行するようにおもちゃのような電車が走っている。彼女の街よりもずっと規模が大きい。

そのさらに向こうにも、まだまだ人家が広がっている。先には水田も畑も雑木林も無いように見える。どこまで行っても屋根の海。彼女はしばらくそれを見つめる。そして思い出したようにタオルで汗をぬぐい、大きく深呼吸し、幾重にもカーブを描きながら続く山道を下って行く。

随分と広い街だ。いや、寂れて煤けた私の街と比べるのがおかしいのだろうが、大きくて、立派で、栄えていそうな街だ。

けれども、漠然と期待していた程の感動は無く、私の目はただ「街がある」という事実を捕らえただけで、それに伴う達成感や喜び

は一向に胸中に湧いてこなかった。そのことに少し戸惑いは感じるけれど、きつと本当にあの街に足を踏み入れればまた違うのだろう。先ほどの雨で道が滑りやすくなっている。私は慎重に足を運ぶ。

思えば、こっちの街の話は聞いたことがない。先ほどまで歩いていた道は大きく迂回して別の場所へ続いているので、私の街からはこの山を越える以外に訪れる方法が無い。そしてその唯一のルートである山道は、ほとんど忘れ去られたような寂れ具合ときている。

地図上で見れば近いのに、なんて遠い場所だったのだろう。

山の上から見たこの街は、あちらこちらに家よりも高い建物があり、国道があり、電車が走っていた。交通の要所、始点、始まりの地という言葉が頭に浮かぶ。

始まりの地。

不意に思いついたその言葉が嬉しくて、自然と唇が緩む。

そう、ここは私の始まりの地になるのかもしれない。

今はまだ、分からないけれど。

それでも私は確かに、虹の橋の架かる山を、今、越えるのだから、ぐねぐねと曲がりくねる道を右に左に進むうちに道幅が広まり、段々と自然のたてる以外の物音が聞こえてくる。

車やバイクのエンジン音。少し遠くから響いてくる、あれは電車の警笛。

今曲がるのが最後のカーブらしい。道は緩やかに下りながら続き、山を取り巻くように左に折れている。その先は平地になり、市街地へと近づいているのだろう。

街が迫ってくる。

私は汗を拭き、火照る頬に手をやって少し息を整える。そして最後の数十メートルを一気に駆けけるように降りる。

街は雑然としている

ざわめきが彼女を包む。

車、自転車、各々の店が流す音楽の切れ端、呼び声、警笛、お喋り。

行きかう人々の中、彼女はわずかに背をかがめて歩く。見知らぬ街に到着したその足取りは少しだけ重い。それは暑さと疲労のせいだけではない。

賑わう通りを行く途中、すれ違いざまに人にぶつかり、彼女は小声で謝る。相手は一瞥もせず足早に去る。残された彼女は少し立ち止まって相手の背中を見送り、すぐに自分が往來の邪魔になることに気づいて歩き出す。

せわしない通りから逸れて裏道に入り、彼女はふつと息をつく。だが、そこあまり落ち着いてはられないとすぐに悟る。彼女の真横に位置するダクトからは生温かい異臭が耐えず吹き出で、全身を取り巻く。薄暗く湿った路地は狭く、昼だというのに一人見当たらぬ。あちこちに置かれた青いポリバケツからはむっとするような匂いがする。ふと顔を挙げれば、くすんだ雑居ビルの立ち並ぶその通りには、所々派手な色合いの看板が乱立している。それらに目をやり、その文言と絵で店の意図を知り、彼女は慌てて踵を返して路地を出る。女一人で歩ける通りではなかった。

そうしてさ迷い、やっとファーストフード店を見つけ、彼女は休むことにする。注文をし、出てきた物を運び、適当な席に腰を下ろして、食事を口に運ぶ。

何も見ていない目で、ただ手と口を動かす。

ざわめきの中にいると自分が独りであるということが妙に身に染みる。山を歩いていた時よりも、今の方が孤独を感じるのはなぜな

のだろう。

ひんやりとした店内は居心地がいい。食べる物だって値段の割には悪くない。椅子に座っているおかげで足の疲れは徐々に引いている。ここ数時間を思えば、私は今一番快適な場所にいます。

それなのに、この身の置き場の無さは何なのだろう。

隣の席で急に声が弾ける。私は思わずびくりと肩を震わせる。数人集まっている女の子たちが、何かのきっかけで手を打って笑いだしたらしい。その視線がちらちらとこちらを刺すような気がする。汗みずくで惨めたらしい格好をした私を笑っているのか。それとも私のことなどまるで眼中になく、別のことで盛り上がっているのか。そんなことを気にしていると、食べ物の味も分からなくなるようだった。口直しに飲んだお茶は薄く、さっぱり味がしない。小さく息を吐き、私は食べ終わった包みをトレーに置く。また隣で笑いが弾ける。

この街に足を踏み入れてからというもの、心が休まる時がない。道は広いようで意外にごちゃごちゃしており、人で溢れている。油断すると誰かにぶつかりそうで自分のペースでなど歩けはしない。人の邪魔にならぬように小さく歩いても、すれ違いざまに強く当たってしまうこともある。とつさに謝ると、衝突してしまった相手はこちらをちらりとも見ず、さっさと歩いていってしまう。まるで私などいないかのように。

そのくせに、人の視線は痛いほどに感じる。

リュックが目を引くのか、それとも汗で汚れきった格好が気になるのか、すれ違う人々の値踏みするような無遠慮な視線が私を常に突き刺す。通りを歩いている時も、こうして寛ごうとしている今もいや、それは思い違いというものかもしれない。もしかしたらそれは私が自意識過剰なだけで、本当は誰も私の事などちつとも気にしていないのかもしれない……

考えれば考えるほど、がんじがらめに捕らえられていくようだ。狭く小さな檻からやっと抜け出たのに、今度は違う物に押し込めら

れようとしている。

叫んで走り出したいような気持ちをぐっと飲み込み、立ち上がり、トレーを片づけて店を出る。むっともった空気の中、人込みを泳ぐように歩きだす。

この街を出よう。

彼女は街を出る

彼女は駅の券売機の前で立ち止まり路線図を見上げる。切符を買う人の邪魔にならぬように少し離れて立ち、わずかに目を細めて、赤色に彩られた線と円が示す駅名を読み取る。しばしそうやって佇んだ後、彼女はふっと小さく息を吐き、駅を離れる。近くにある売店で飲み物だけ買い、今が一日の盛りとばかりにぎらつく夏の光の中を歩き始める。

しばらくして彼女は繁華街の外に出る。広い道には絶えず車が走るが、歩く人の姿はほとんど見当たらない。大型のショッピングセンターを通り過ぎた後は店舗の類は減り、代わりに人家が現れ始める。通り過ぎる車の排気ガスに、庭先に植えられていた花が揺れる。それを見るときもなしに眼の端に留め、彼女はペットボトルの水を一口含む。

街の喧騒が遠くなる。

彼女は歩いて行く。その目は何かをこらえるかのように、じつと道の先を見据えている。

電車を使った方がいい事は分かっていた。けれど、そうすることはできなかった。駅で路線図を見上げながら、私は券売機に近寄ることすらできなかった。

無機質な駅名だけが羅列された路線図は私を導きはしない。それはあくまで、行くべき場所を持つ人にとっての道標に過ぎなかった。そう、行くべき場所を持つ人の。

路線図を見ながら改めて思い知ったのは、私には行くあてがないということだった。

ただ虹の向こうを、山のその先を見たいと思って飛び出してきたのに、いざ来てみれば何があるわけでもない。ここはあの街以上に広く、混沌とした場所だった。人の目が刺さり、物で溢れかえり、

常に落ち着かない街。きつとここで生きて行こうとすれば、私はあの街にいた時以上に押さえつけられ、身動きが取れなくなる。

だからここを出ようと思った。それなのに、いざどこに行こうかと考えてみると分らない。目的地は霧のように頭の中を漂って、一向に具体的な像を結ばない。掴みようがない。

そのぼんやりとしたものを追うこともできず、ただ「ここではない」という思いだけで、今、私は歩いている。私の街を出た時と同じように、どこまでも続く道をひたすらに進んでいく。

右、左、右、左。

交互に足を踏み出しながら。

道の左右に続く家々。途切れることなくひしめき合うその一つ一つに、人の営みがある。皆ここでの暮らしに満足し、あるいは多少の不満を抱えながらも折り合いをつけ、日々を過ごしている。

私にとってはそうではない。私の場所はここではない。だから出て行く、それまでの事だ。

けれど、と胸の中で誰かが呟いた。

「ここではない」のなら、どこまで行けば見つかるんだ、お前の場所とやらは。

彼女はさ迷う

夏の陽が赤みを帯びてくる。道に伸びる影が陽炎の中で踊る。排気ガスに揺れる貧相な街路樹からカナカナと涼しげな歌が響く。やと鳴き始めたヒグラシの声を背に、彼女は道に行く。

辺りは夕の気配が濃くなり、空気の温度もわずかに下がっていた。それでも、夏の苛烈な陽光が辺りをしっかりと焼き照らしていたせいで、むわりとした空気が今なお夕景を満たしている。

先ほどの大きな街はかなり遠くなった。それでも、振り返れば高いビル影がまだはつきりと見える。その向こうには今日越えてきたあの山がある。高い建物のせいだろうか、彼女の街から見ると、それは幾分か小さく感じられる。背後からむくむくと湧きあがる入道雲に押されて縮こまっているかのようだ。

彼女は今やうつむき、朝より何倍も重い荷を負うかのような足取りでゆらゆらと歩いている。道は不自然なほどに真っ直ぐに伸びて彼女を誘う。終わりなど無いかのように。

彼女はもう道の先を見ない。

ただ足元だけを見て歩く。

左の足首がジンジンと痛む。

もうどれくらい歩いたのかも分からない。距離の概念はとうに無くなって、ひたすらに足を動かすだけの時間が随分と続いている。私はからっぽの頭で、機械のようにただ右、左、と足を差し出している。

私はどこに行くのだろう。

この道はどこに続いているのだろう。

そんなことを時折思う。けれど思うだけで、積極的に調べ明らかにしようという気にはならない。

先ほどの街を出た時の「ここではない」という思いすら今では薄れ、私は最早、自分がなぜ歩いているのか、それすら分からない。

そりゃそうだ、と誰かがわらう。

お前には、行きたい場所も目的も大義名分も何もありはしないんだ。

お前はただ逃げたかっただけ。面倒なことや思い通りにならないことを、全部捨てたかっただけだ。

子供のかんしゃく、積み上げたおもちゃの街が気に入らなくて、全てをぶち壊して無かったことにしてしまう乱暴なすぐさとおなじ。

単なる無計画で衝動的な行動だ。

だから今、お前はもういいか分からなくなっている。それでも引き返せずに惨めに歩いている。

そんなこと、お前だってとつくに分かっているんだろう？

違う。

逃げているだけだってお前は言う、それは私にも分かっている。けれど、ただ逃げただけじゃない。

もっと良くありたいから、もっと自由でありたいから出てきたんだ。

そう、私は、もっと大きくなりたい。広くありたい。

あんな黒い気持ちに捕らわれて、じくじくと体の中から腐っていくような思いはしたくない。

そのためにはあの街じゃだめだった。他の場所が必要だった。だから出てきたんだ。

それは後付けの言い訳だ。自身の行動を正当化したいがための氣取った言い分。かっこつけの気障な台詞。

結局、どんなにこじつけたって、お前は単なる逃亡者、現実に負

けた惨めな負け犬にすぎないんだ。お前自身が認めたように。そう
でなけりや、なぜ街を出た時に「逃げる」なんて言葉が浮かんだ？
あまつさえそこに甘美な響きさえ見出して、笑ったりしたんだ。
お前は敗北者だ。

この旅に、意味も目的地もありはしない。
何も見いだせない、無意味な逃避行だ。

そんな事はない、無意味なんかじゃない。

いいや、お前だって気付いているはずだ。この先には何もない。
あるのはただの田舎町と道、ただそれだけだ。

そんなこと、もっと先まで行ってみなきゃ分からない。

分かるさ、進めば進むだけ期待は膨らむ、けれどそこには凡庸な
ものしかない、お前はどんどん失望し、細っていく。

違う、そんなことない、私は、きつと、この先は、何かがあつて、
それはきつと私を変える物で――

不意に冷たい風が頬に触れた。いつの間にか陽の光は真っ黒な雲
に遮られ、不穏な薄暗さが辺りを支配していた。

ぽつん、と大粒の水滴が、瞼で、ついで鼻の先で弾けた。

雨の後に虹が立つ

雨はあまりに唐突に降り始める。

それは乾ききった風景をあつという間に水彩画の如くにじませ、全ての境界を水の膜で曖昧にする。

彼女は辺りを見回し、マンションの軒先に駆けこむ。この一瞬で体はかなり濡れてしまっている。しっとりと濡れた短い髪をタオルで拭きながら、彼女は空を見つめる。

しばらくすると黒雲がまだらに切れ、合間から陽の光が差し始める。それはみるみるうちに広がり、街にいくつもの光の筋を投げかける。大粒の雨は西日を受け、水晶の粒を撒いたように輝きだす。

彼女はそれを見ている。

うつろな目に、わずかに陽の光が当たる。

豪快な雨だ。足の痛みも心の疼きも洗い流すような強い雨。土の濡れる匂いに、なぜか胸が締め付けられる。私は空を仰ぎながら深呼吸をする。

少し空気が冷えたのか、半袖の腕にあたる風が心地良い。私は目を閉じ、しばらくそうして雨音と風音を聞く。波立っていた心がすっと風ぐ。

辞書の「狐の嫁入り」という項目にこの風景を貼っておきたい、そう思わせるほどの見事な天気雨。風景全てが輝きながら混ざり合っ、ばやけた色彩となっている。

この雨が止むまで。

私はリュックを下ろし、頭を拭きながらぼんやりと胸の内で呟く。

この雨が止むまで、少し休もう。

やがて雨はそばそばと大人しくなる。時折雷鳴が響くが、その低音も今は遠い。嵐はもう間もなく去ろうとしている。

彼女はマンションの軒先に座り込み、膝を抱えて空を見上げている。幼子のように何も考えず、ただただ空を見上げている。

リュックは傍らに投げ出され、ころりと転がった姿勢のまま主の拳動を待っている。

綺麗な空だ。

夕の茜色と雨雲の灰色が作りだす混沌とした色合い。その合間から西日がカーテンのように差し込んで、辺りを照らしだしている。

なんて美しいんだろう。

座り込んだまま、私は何でもない市街地の風景に見とれて動き出すことができない。

体の疲れもある。けれど一番洪っているのは心だ。心が動くことを拒否し、歩むことを阻止し、ここに座っていようと誘う。

その声に従っていたいと思う。

けれど、そうはいかないことは分かっている。ここは誰かの住む場所だ。勝手に長時間居座って良いわけがないし、何よりそろそろ日が暮れる。もう歩きだして、夜にはどこかに辿り着かなくてはならない。

私は茶色いレンガの床に手をつき腰を上げる。体がひどく重い。のろのろと立ちあがって、転がっていたリュックを引き寄せる。ずっしりと重い手ごたえを感じながら肩に背負い、マンションを後にする。

道のあちらこちらに水たまりができている。それを避けながら、私は道の続きを歩き始める。

どこへ行くこうというのだろう。

この先に何があるのだろう。

分からない、何も分からない。

それでも行かねば。私は、探さなくては。
虹の向こうを。

彼女は歩き出す。わずかに左足を引きずりながら、重い足取りで道の続きを辿ろうとする。

背後から不意に涼しい風が吹く。

彼女は泣きだしそうなかめ面をふと緩め、立ち止まる。

なぜか胸がざわめく。

彼女は振り返る。そして、大きく眼を見開く。

山の上に七色の光の橋がかかっている。

それは紛れもない虹だった。

七色の光は強く、しかし、しんと静かに山の上に覆いかぶさり、街を、彼女を、見降ろしている。虹は空の茜色に滲むことも無く、手に取れそうな確かさで輝いている。

私は振り返ったまま身動きもとれずにいた。
なんて虹だろう。

あまりに大きく、あまりにはつきりと、それは視界いっぱいに広がっている。片足から反対側の足まで、見事にくつきりと、掠れることのない輝き。強く、静かな光。

こんな虹、見たことが無い。肌が粟立っているのが自分でもよく

分かる。私は思わず、自分で自分を抱きしめるように腕を掴む。胸が切なさではきれそうに苦しい。なぜこんなに心を動かされているのか分からず、私はただ虹を仰いでいる。

あの虹の向こうには、何がある？

心の中で呟く。答えがゆっくりと浮かび上がる。

虹の向こうには、私の街。

私は路上に立ちつくし、茫然と彼方の七色の光を見つめていた。全てが反転していた。

私が捨ててきたはずの街が今、虹の向こうにある。

ならば、虹の向こうの地とは、私が目指すべき場所は、あそこではないか？ 全てが始まったあの街ではないのか？

けれど、街にいたときは確かにここが、今私の立つこの場所が虹の向こうだったのだ。だから私は出てきた。ずっとここまで歩いてきた。

それなのに、どういうことだ。まるで馬鹿みたいじゃないか。これではいつまでも虹の向こうになんて辿り着けやしない。私は——混乱する頭の中に、ずっと一つの思いが浮上した。それは狼狽や驚きといった他の全ての思いを押し分け、心の真ん中に現れた。

そうだ。

そういうことだったんだ。

私はその思いを掬い取り、受け入れた。心は不思議にずっと静まっていた。

虹の向こうには、辿り着けない。

そうだ、どれだけ焦がれても、望んでも、私は永遠に虹の向こう

には辿り着けないのだ。虹の向こうとは、言うなれば「ここではないどこか」だ。けれど「ここではないどこか」は、辿り着いた途端に「ここ」になる。どれだけ憧れた所で、私が両足を着けたならば、そこは理想の地から現実の世界になるのだ。

初めはそれでもいいのかもしれない。虹の向こうだと思っていた場所に辿り着いた喜びの方が勝るのかもしれない。

けれど、時が経つにつれてその感動は薄れ、日々の澱が溜まり重くのしかかるようになる。そうなった時、私はきつとまた新たな「虹の向こう」を求める。

終わりのない堂々巡り。蜃気楼のオアシスを追って砂漠をさまよう旅人。

それではいつか、私は焦がれて野たれ死ぬ。

「……ははは」

気が付くと私は笑いだしていた。おかしくて、悲しくて仕方がなかった。あるはずの無い物に焦がれ、そのためにさ迷う自分が滑稽でならなかった。

永遠に手に入らない物を追ってなんになるう？

急に体中の力が抜けて、どっと疲れが増したようだった。私はふらふらと先ほどのマンションに戻り、軒先に倒れるようにして座りこむ。

うつむきながらここまでの道のりを思い出す。

私の街を出た時のあの高揚、山道の静かなざわめき。山頂に立った時に真っ先に感じた、肩すかしをくらったような気分。そしてあの賑やかな街での孤独。

きっと、ありもしない虹の向こうに焦がれているうちは、私は何度でも、期待外れの失望と異邦人の孤独を味わうのだろう。

いつかは、自分の両足をしっかりと地に着け、そこを己の場所と決めて生きる覚悟をしなくてはならない。そうでなければ、この気持ちはいつまでも私に付きまとう。

私は再び空を見た。茜色には少しずつ青みが混じり、夜が近づい

て来ている。虹は未だに山の上にかかつてはいるが、先ほどよりもずっと色は薄い。こうして見えているうちにも、光はほとんど薄れていく。鮮やかな輝きは失われ、少しずつ空と同化していく。消える。

やがて、空は鉛色の雲の切れはしだけになった。どれだけ目を凝らしても、もう七色の光は見えなかった。

虹の最期を見届けて、私は立ち上がる。リュックを担ぎ直し、ペットボトルの水を一口だけ飲んで歩き出す。

もう、あれほど見事な虹を見ることはないだろう。あれは一生で一度の虹。ずっと記憶に残り、時折心に浮かんでは、私を理由の無い高揚と切なさで締め付ける理想の虹だ。

けれど、きつと私はこれからいくつも虹を見る。あれほど見事でもなくとも、切れはしであつても、紛れもない虹を見る。様々な場所で、様々な時に。その度に虹の向こうには違う景色が広がり、私は心を動かされるだろう。

でも、他の誰かから見れば、私のいるこの場所こそが虹の向こう側なのかもしれない。まだ見ぬどこか遠い地も、良く知っている街かども、どこだって虹の向こうになり得るのだ。

だとしたら、私はどこでも生きていける。どこへだって行ける。そんな気がした。

陽は傾き、辺りには宵の気配が漂い始めている。夕風の中をふらふらとコウモリが飛び、街灯が瞬き始める。

彼女はリュックを背負い、背筋を伸ばして街に向かう。その足取りは少し重いが、迷いはない。

右、左、右、左。

交互に差し出される足はしっかりと地面を踏みしめ、一歩一歩前

へ進んでいる。

街に着く頃にはすっかり日も暮れるだろう。家に着くのは明日になるはずだ。遠い道のりを思いながらも、その唇には薄らと笑みが浮かんでいる。

行く手に広がる街灯りのきらめきを受け、彼女の黒い瞳は静かに輝いている。

涼やかな風が吹いて彼女の袖を揺らす。どこかでりん、と風鈴の音が微かに響く。

街向こうの山の上には、一番星が瞬いている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9277v/>

虹を越えて

2011年9月23日03時14分発行